

原著論文

## 源氏物語柏木論——道信の和歌表現——

## 要旨

源氏物語五十四帖中、柏木は、若菜上巻・若菜下巻・柏木巻を中心に登場する。女三の宮への想いに苦悩する柏木の人生について、柏木のモデルとなった歴史上の人物である藤原道信に関連する和歌表現によって、紫式部は柏木の人物像を描写している。

キーワード 源氏物語、柏木、女三の宮

## 一 はじめに

柏木は、若菜上巻・若菜下巻・柏木巻と集中的かつ詳細に描かれている人物である。女三の宮への想いに苦悩する人生について、柏木のモデルとなった歴史上の人物に藤原道信（天禄三年九七二年～正暦五年九九四年）<sup>①</sup>がいる。道信は、花山院女御婉子<sup>みづな</sup>に恋をし、二十三歳で夭折した。『湖月抄』<sup>②</sup>には柏木と女三の宮の恋について、在原業平と二条后、花山院女御と藤原（小野宮）実資<sup>さねすけ</sup>、藤原道信が例になっている。他に、頼定と麗景殿綏子<sup>すいし</sup>や承香殿女御が例にある。藤本勝義氏は、婉子と道信、綏子と頼定に焦点を当てて指摘なさっている。「柏木が源氏出家後を期待して女三宮への思いを秘める箇所は、花山院出家後の実資正室となった婉子の例が想起された可能性が高い。そして、この時の柏木の俤を宿すのは、正室とした実資ではなく、婉子女王に懸想しつづもかなえられず、23歳にして夭折した道信中将といえよう。」

本稿では、柏木のモデルとなった歴史的人物として、道信の和歌表現を考察したい。また、道信と親交のあった藤原実方（天徳二年九五八年頃から長徳四年九九八年）の道信に対する哀傷歌と柏木巻の喪に服する場面との関連を述べたい。

## 柴村 抄織（教育学科）

## 二 「泡の消え入るやうにて」の和歌表現

柏木は三十一、三歳で没する。女三の宮との恋により、病んでしまい、死に至る。死の場面は「泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ」と表現され、道信の死を悼む実方の和歌と同じ表現となっている。

道信の中将、「花もろともに見む」と八月ばかりに契り<sup>ちぎ</sup>にけるを、かの中将なくなりける秋

78 見むと言ひし人ははかなく消えにしをひとり露けき秋の花かな

『実方集』<sup>③</sup>、後拾遺集卷十・哀傷・五七〇

道信の死は正暦五年（九九四年）七月十一日卒のため、八月は前年の八月になる。道信は、花山院出家後に花山院女御であった婉子と実資との結婚を悲しむ和歌を詠み、二十三歳で夭折している。『大鏡』師輔伝に「憂きは身にしむ心地こそすれ」とは、今に人の口にのりたる秀歌にて侍めり。」とあり、道信の和歌について、人々の注目が集まっていたことがわかる。『拾遺和歌集』以下にも四十九首と多く入撰している。夭折した道信の死因は、当時、都で死者が多く出た疫病による。木船重昭氏の御論<sup>④</sup>によって述べる。

『日本紀略』正暦五年七月の条に「自去四月至七月京師死者過半。五位以上六七人」同十二月の条に「今年自正月至十二月、天下疫癘最盛。起自鎮西遍滿七道。」『百鍊抄』正暦五年の条に、「今年、皰瘡流行。」とある。猖獗を極めた流行病天然痘のために、道信もなくなったのであろう。『尊卑分脈』『勅撰作者部類』『二十一代集才子伝』は、卒年を正暦五年とのみ記すが、『小右記目録』は、正暦五年（九九四）七月十一日。とすると「八月ばかりに」は誤りであろう。<sup>⑤</sup>

確かに昨年八月であるなら「ばかり」は使わないと思われる。

『道信集』<sup>⑥</sup>にも「消えぬべき」を使っている和歌がある。『新古今和歌集』にもとられている。

ある女のもとにいきたるに、かれかこゝろにもあらで、かたへにひかれてかへる

73 心にもあらぬわか身のゆきかへりみちのそこにてきえぬへきかな  
詞書をみるとかなわぬ恋ではない。ただし、消える存在としているのは、源氏物語の柏木と同じである。柏木の死因は疫病ではなく、脚病（＝脚気）と源氏には言いながら精神的な圧迫で死に至る。道信歌には「消え」があり、道信の死を詠んだ実方七八番歌は、「消え」「露けき」「花」の縁語で、柏木の死の場面では「消え」と「泡」になっている。

御祈禱などとりわきてせさせたまひけれど、やむ葉ならねば、かひなきわざになむありける。女宮【落葉の宮】にも、つひにえ対面しきこえたまはで、泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ。

（柏木巻④ 318頁）

「やむ葉ならねば」は、「我こそや見ぬ人こふる病すれあふ日ならでは止む葉なし」（『拾遺集』恋一、六六五、読人しらず）、「思ふ仲酒に酔ひにし我なれば葵ならでは止む葉なし」（『古今六帖』草・葵）を引き、『古今六帖』では葵に逢ふを掛けて恋の病ひを止める葉は恋しい人と逢う以外ないという意味を表す。「泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ」

は、古注釈の『異本紫明抄』<sup>⑨</sup>が指摘し、現行の注釈書でも指摘されている紀友則の和歌がある「水の泡のきえでうき身といひながら流て猶もたのまるゝ哉」（『古今和歌集』恋五・七九二・題しらず・紀友則）（すぐに消えるはずの水の泡が消えもせずに浮くのと同じように、死にもしないではかなくつらいわが身だといひながらも、泡が流れて行くように涙にくれつつ恋の成行きに身をゆだねて、このままだりあの人を頼りにせずにはいられないことありますよ。）と、「うきながら消ぬる泡ともなりなむ流れてとだにたのまれぬ身は」（『古今和歌集』恋五・八二七・紀友則）（浮いたままで消えてゆく泡になってしまえるなら、その泡にでもなつてしまいたい。泡ならば流れ流れてやがてどうにかなろうけれど、涙にくれながら成りゆきにまかせたとて期待の持てないこのわが身としては）<sup>⑩</sup>とがある。古今八二七番歌が柏木の死の場面に近い。叶わない恋をして泡のようにはかなく死ぬ場面の引歌となっている。

『万葉集』にも消える命の表現がある。「朝霜之消安命 為誰 千歳毛欲得跡 吾念莫國」（『万葉集』・一三七五・よみ人しらず）朝霜のうちに短い命なのに、あなたのために、千年も生きていたいと思うのです。命が千年に比べれば消えやすく短いとしてるので、柏木の例には当たらない。「大伴田村大娘与妹坂上大嬢歌一首 / 沫雪之可消物乎 至今尔 流經者 妹相曾」（『万葉集』・冬相聞・一六六二）淡雪のようにいまにも消えてしまふはずなのに今もなんとか生きながらえているのはあなたにお逢いしたい一心からです。はかない命がながらえているのはあなたへの想いゆえとして、万葉集一三七五番歌と同様の例であり、柏木には当たらない。こうした発想は、万葉集以来のもので人々の心にあったが、柏木の場面にはあてはまらない。『後撰集』大江千里歌を引歌とし、『千載集』公任歌が参考歌と村井利彦氏が指摘なさっている。

「世の中の心になはぬ」など申しければ、「ゆくさきたのものしき身にて、かゝる事あるまじ」と人の申し侍りければ

流れての世をもたのまず水の上の泡に消えぬるうき身と思へば

『千載集』卷十九釈教、  
〔後撰集〕卷十五・雜一・一一一五・大江千里

維摩經十喻この身は水の泡のごとしといえる心をよみ侍りける  
ここにきえかしこにむすぶ水の泡のうき世にめぐる身にこそありけ  
れ

大江千里の歌は、友則古今八二七番歌「うきながら消ぬる泡ともなり  
なむ流れてとだにたのまれぬ身は」と同じような歌になっている。人  
生のはかなさが伝わってくる。詞書の「世の中の心になはぬ」は、  
「わが身かばかりにてなどか思ふことかなはざらむとのみ心おごりする  
に」(若菜上④147頁)と確かに合っている。

そして、柏木巻の「消え入るやう」は、出家後の女三の宮の様子と、  
死の直前に女三の宮の出家をきいた柏木の心情表現に使用されている。  
女三宮と柏木の二人は、同じときに同じ心情であった。

宮【女三の宮】は、なほ弱う消え入るやうにしたまひて、はかば  
かしうもえ見たてまつらず、ものなども聞こえたまはず。大殿(おとし)  
(光源氏)も、「夢のやうに思ひたまへ乱るる心まどひに、かう昔お  
ぼえたる御幸のかしこまりをも、え御覽ぜられぬらうがはしさは、  
ことさらに参りはべりてなむ」と聞こえたまふ。

(柏木巻④308～309頁)

出家後の女三の宮の様子に「消え入るやうに」が使われており、前後  
に朱雀院と光源氏が出家を惜しみ、衝撃を受けている心情が語られる。

語らない女三の宮は、出家によって生きながらえている。出家が不可  
避であったことがわかる。女三の宮の出家をきいた柏木の方はというこ  
の衛門督【柏木】は、かかる御事【女三の宮の出家】を聞

きたまふに、いとど消え入るやうにしたまひて、むげに頼む方少な  
うなりたまひにたり。女宮【落葉の宮】のあはれにおぼえたまへ  
ば、ここに渡りたまはむことは、今さらに軽々(かるがる)しきやうにもあらむ  
を、上【母上】も大臣【父大臣】も、かくつと添ひおはすれば、

おのづからとりはづして、見たてまつりたまふやうもあらむにあぢ  
きなしと思して、【柏木】「かの宮【女二の宮】に、とかくして今  
一たび参うでむ」とのたまふを、さらにゆるしきこえたまはず。

(柏木巻④310～311頁)

「消え入るやうに」は、柏木の病状が悪化して、助かる見込みがない  
ときに使われている。女二の宮から柏木の見舞いにくることは身分上、  
難しく、強いて見舞いにきたとしても、姿を人目に見せることはよくな  
いとして、死の間際にも会えなかった。皇女を妻とする男性の難しさが  
現れている。

また、女三の宮からの返歌にも心情に「消ゆ」の表現が使われ、柏木  
の「この世の思ひ出」という重いことばにつなげている。

【女三の宮】「心苦しう聞きながら、いかでかは。ただ推しはかり。  
残らむ、とあるは、

立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだる煙くらべに  
後るべうやは」とばかりあるを、あはれにかたじけなしと思ふ。

【柏木】「いでや、この煙ばかりこそは、この世の思ひ出ならめ。は  
かなくもありけるかな」と、いとど泣きまさりたまひて、御返り、  
臥しながらうち休みつつ書いたまふ。

(柏木巻④296頁)

柏木の死は、実方による道信の死「はかなく消えにし」の表現によっ  
て、道信の面影が強くなり、柏木がはかなく亡くなったことが強調され  
る。道信は、実際には疫病で命を落としたが、叶わない恋の和歌は人の  
記憶に強く残った。柏木は、はかない恋によって命を落とした。道信の  
和歌から恋死にした柏木の人物造型が明確になっている。読者は、実際  
に亡くなった道信をどうしても思い浮かべるのだから、柏木の心情が迫っ  
てくることは必須である。紫式部は、身分の高い女性に恋をした男性の  
心情について現実感をもって克明に描写したと考えられる。

### 三 柏木死去後の哀傷の場面

柏木の死去後の哀傷の場面に出家後の女三の宮が鈍色の衣をきているが、女三の宮は、出家をすることにより、墨染めを着ることとなった。女三の宮と女二の宮は、鈍色の衣を着て、二重写しとなっている。

宮【Ⅱ女三の宮】も起きゐたまひて、御髪みかみの末のところせう広がりたるを、いと苦しと思して、額など撫なででつけておはするに、几帳を引きやりてゐたまへば、いと恥づかしうて背きたまへるを、いとど小さう細りたまひて、御髪は惜しみきこえて、長うそざたりければ、背後うしろはことにけぢめも見えたまはぬほどなり。すぎすぎ見ゆる鈍色にじいろども、黄がちなる今様色けふよういろなど着たまひて、まだありつかぬ御かたはらめ、かくてしもうつくしき子どもの心地して、なまめかしうをかしげなり。

【源氏】「いで、あな心憂。墨染こそ、なほ、いとうたて目もくるる色なりけれ。かやうにても見たてまつることは絶ゆまじきぞかしと、思ひ慰めはべれど、古りがたうわりなき心地する涙の人わろさを、いと、かう、思ひ棄てられたてまつる身の咎とがに思ひなすも、さまざまに胸いたう口惜しくなむ。取り返すものにもがなや」と、うち嘆きたまひて、  
(柏木巻④ 321～322頁)

ここまでが女三の宮の出家後の姿を光源氏が嘆く場面である。次は、夕霧が落葉の宮と御息所（Ⅱ落葉の宮の母）を訪問した場面である。

御前の木立きだていたうけぶりて、花は時を忘れぬけしきなるをながめつつ、もの悲しく、さぶらふ人々も、鈍色にやつれつつ、さびしうつれづれなる屋やつ方、前駆さきはなやかに追ふ音して、ここにとまりぬる人あり。「あはれ、故殿【Ⅱ柏木】の御けはひとこそ、うち忘れては思ひつれ」とて泣くもあり。大将殿【Ⅱ夕霧】のおはしたるなりけり。御消息聞こえ入れたまへり。  
(柏木巻④ 328頁)

「花は時を忘れぬ」については、『実方集』の道信と実方の贈答歌に類似表現がみられる。

おなじ頃、道信中将に、花につけて

26 墨染の衣憂き世の花盛りをり忘れても折りてけるかな

底本（書陵部蔵本『実方集』）の排列によれば、底本二五の詞書が及んでいて、堀河中宮皇子（九四七―九七九）崩御御葬送のころ、というしだいだが、書陵部本『実方朝臣集』の小異ある歌（第三句「はなざくら」）の詞書「にわじのみかどうせたまひてのころ、桜の枝を道信の中将にやるとて」が正しい。仁和寺の帝、円融院崩御、正暦二（九九一）二月のころ。永延二年（九八八）、左近少将。正暦二年（九九一）九月左近中将。《中古歌仙三十六人伝》したがって、《中将》は極官で記したもので、当時は少将である。《墨染》と《花盛り》、《をり忘れ》と《折》の対照となっている。

返し

27 飽かざりし花をや春の恋ひつらむありし昔を思ひ出でつつ

『新古今和歌集』七六〇・七六一にもとられている実方と道信の贈答歌である。

『道信集』の詞書では、「みかどうせたまひけるころ、おもしろきさくらにつけて、実方中将に」とあり、詠者が反対となっている。

柏木巻の柏木哀傷の場面も同じく三月の花の時期で、実方歌（または道信歌）の《墨染》と《花盛り》は、柏木巻の「鈍色に」と「花は時を忘れぬけしき」の対照と同じになっている、また、実方歌の《をり忘れ》と《折》の対照は、「時を忘れぬ」にかかっている。

夕霧が落葉の宮を訪ねる場面は、柏木と夕霧を間違える落葉の宮周辺の様子を表し、夕霧と落葉の宮の今後の展開を含んでいる。

柏木の親と夕霧が哀悼する場面をみてる。

夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ。この御畳紙に、

【致仕の大臣】木の下のしづくに濡れてさかさまに

かすみの衣着たる春かな

大将の君【Ⅱ夕霧】、

亡き人も思はざりけむうちすてて夕べのかすみ君着たれとは  
弁の君、

うらめしやかすみの衣たれ着よと春よりさきに花の散りけむ  
御わざなど、世の常ならずいかめしうなむありける。

(柏木卷④ 336頁)

「霞の衣はたれ着よ」という表現は、女三の宮も落葉の宮も墨染めを着ている二重写しを示しているのではないか。こういった人物の重ね合わせは、柏木と夕霧にも及んでくる。夕霧が柏木の死後に落葉の宮のところを訪ねる場面である。

伊予簾かけわたして、鈍色の几帳の更衣したる透影涼しげに見えて、よき童のこまやかに鈍ばめる汗衫のつま、頭つきなどほの見えたる、をかしけれど、なほ目おどろかるる色なりかし。

今日は簀子にゐたまへば、褥さし出でたり。「いと軽らかなる御座なり」とて、例の、御息所おどろかしきこゆれど、このごろ悩ましとて寄り臥したまへり。とかく聞こえ紛らはすほど、御前の木立ども、思ふことなげなるけしきを見たまふも、いとものはれなり。柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して、枝さしかはしたるを、【夕霧】「いかなる契りにか、末あへる頼もしさよ」などのたまひて、忍びやかにさし寄りて、

【夕霧】「ことならばならしの枝にならさなむ

葉守の神の許しありきと

御簾の外に隔てあるほどこそ、恨めしけれ」とて、長押に寄りゐたまへり。「なよび姿はた、いといたうたをやぎたるをや」と、これかれつきしろふ。この御あへしらひきこゆる少将の君といふ人して、【落葉の宮】「柏木に葉守の神はまさずとも人ならすべき宿の梢かうちつくなる御言の葉になむ、浅う思ひたまへなりぬる」と聞こゆれば、げにと思すにすこしほは笑みたまひぬ。(柏木卷④ 337～338頁)

「柏木と楓」については、「夕霧から御息所へ」時しあればかはらぬ

色にほひけり片枝枯れにし宿の桜も(柏木卷 332～333頁)から、柏木が亡くなっていることを表すのだが、柏木がまた若やかなる色をして、葉守の神も許すとしている。『枕草子』に「柏木、いとをかし。葉守の神のいますらむも、かしこし。兵衛の督、佐、尉など言ふも、をかし。」とある。柏木巻に、夕霧が落葉の宮に恋する姿が描かれ、女房たちが恋する男性の姿について、噂し合っている。恋に打ち込む柏木を継承するのが夕霧となっている。柏木と夕霧の組み合わせは、道信と実方に重なっている。道信と実方も行事で舞人となっていた和歌が残っている。

『道信集』三三・三三三(『実方集』五二・五三、新古今・雑下 一八九八小異あり)

臨時祭のまひ人にてもろともにありしをり、ふたりながら四位  
になりて、まつりの日、実方中将

いにしへの山井の水にかけ見えて猶そのかみのたもとこひしも

かへし

いにしへののはなの「山井の衣」いろのなかりせはわすらるゝ身となり  
やしなまし

仲が良い二人の貴公子の様子が伝わってくる。夕霧と柏木に通じるものがある。若菜上巻の夕霧と柏木の舞の場面では、太政大臣(頭中将)と光源氏を思い出している。「権中納言【夕霧】、衛門督【柏木】おりて、入り綾をほのかに舞ひて、紅葉の蔭に入りぬるなごり、飽かず興ありと人々思したり。いにしへの朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕べ、思ひ出でたまふ人々は、権中納言、衛門督のまた劣らずたちつづきたまひにける」(若菜上巻④ 95頁)とある。

#### 四 「うきは身にしむ」の和歌表現

柏木は、幼少の頃から女三宮の話をきいていて、親しみがあつた。柏木が女三の宮を懸想して六年間という長い時間が経っている。

『道信集』には、この時間性と関連する和歌がある。



いかてとおもふ人に

34 よにふれはわか身のみこそうかりけれ人のつらきもたれによりそは

あるやむことなき人の家のまへをわたるに、すくる月日とす  
こしたるを

35 人はみなすくる月日をなけくとか ものおもふ身にはえしらさり  
けり

身分が高い女性に恋をして、その想いに心が捉われて年月が過ぎること  
もわからないほどであると表現している。叶わない恋の心に捉われて、  
身は過ぎてゆく時間を感じ取っていない。この時間性に捉われない理由  
として、歴史的に当時の皇女の結婚が再婚することが普通であったこと  
が挙げられる。皇女が若いうち、相応しい相手は年齢を重ねた身分の重  
い男性となる。皇女の最初の夫が出家後に、若い男性がその間に出世を  
して皇女と再婚することがあった。以前から柏木は、皇女でなければ結  
婚をしないとして、独身をとおしていた。昇進して女二の宮（落葉の宮）  
と結婚したが、女三の宮に対する想いとは違っていた。

まことや、衛門督は、中納言になりにかかし。今の御世にはいと  
親しく思われて、いと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても、  
思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮  
をなむ得たてまつりてける。下臈の更衣腹におはしましければ、心  
やすき方まじりて思ひきこえたまへり。人柄も、なべての人に思ひ  
なずらふれば、けはひこよなくおはすれど、もとよりしみにし方こ  
そなほ深かりけれ、慰めがたき嫉捨にて、人目に咎めらるまじきば  
かりに、もてなしきこえたまへり。

（若菜下巻④ 217頁）

「思ふことかなはぬ愁はしき」から女二の宮と結婚するが、皇女でな  
ければと実際に結婚しても女三の宮でなければ意味がないことに気づく。  
柏木が女三の宮に言う言葉に自分のことを「数ならねど」「身の数なら  
ぬ一際」（若菜下 224頁）と相手が女三の宮の場合は卑下している。女二

の宮との結婚の前に柏木は、源氏の養女とされた玉鬘に懸想するが、自  
分の父の内大臣が実父と知り、姉であったことを知る。異母妹と知らな  
かった玉鬘への懸想は、「岩漏る中将（胡蝶 172頁）」といわれる。

これまでも満足のゆく恋や結婚ができていない状況となっている。  
そして、皇女である女二の宮（落葉の宮）も、柏木の死後、夕霧と二度  
目の結婚をしている。

皇女の結婚については『養老律令』の継嗣令によると、「凡ソ王ノ親  
王ヲ娶リ、臣ノ五世王ヲ娶ル者ハ聴セ。唯ダ五世王ノミ親王ヲ娶ルコト  
ヲ得ズ」である。すなわち、四世王以上の皇族は皇女と結婚することを  
許されるが、臣族（臣下）では、四世の皇女までは結婚は許されず、五  
世以下の皇女に限っては許される。継嗣令によると、冷泉帝、准太上天  
皇の光源氏と皇族の蜩宮しか候補者にならない。桓武朝／花山朝（七八  
一～九八六年）の計百六十余人の一世皇女のうち有配偶者はわずかに二十  
五人、約十五％に過ぎず、約八十五％が未婚である。しかし、時代とと  
もに皇女の臣下への降嫁は増えていった。歴史上、嵯峨朝／花山朝（八  
〇九～九八六）の皇女で臣下に降嫁した者として記録に残るもの十二名、  
そのうち従三位以上と結婚したのは五名、四位二名、五位二名、六位二  
名である。官職の低い者と結婚した皇女もいたので柏木（正四位下）も  
入ってくる。

また、相手の男性の年齢は、四十歳代三名、五十歳代一名であり、  
韶子内親王は十五歳で四十九歳の源清陰と結婚している。韶子の姉の普  
子もまた二十歳で五十三歳ほどの参議源清平と結婚し、三十三歳の年の  
差がある。光源氏と女三の宮との二十六歳の年の差は歴史上ではまだ差  
がない方であった。『河海抄』には、嵯峨皇女の源潔姫（二十四歳以下）  
が藤原良房（二十四歳未満）従五位以下に降嫁している。官職の低い者  
と結婚した皇女もいたので柏木も入ってくることになる。そして、天皇  
からの評価も含まれる。醍醐皇女の康子内親王（二十七歳）が藤原師輔  
四十八歳に降嫁したときは、才幹人格を天皇が評価したことによる。柏

木も朱雀院からの期待を受けてはいた。

『道信集』には、花山院女御婉子が実資と再婚したときの嘆きの和歌がある。(『金葉集』・『詞花集』・『栄花物語』見果てぬ夢・『大鏡』実頼伝・『大鏡』師輔伝)

あるところに、うらやましきことをきゝてきこゆる

16 うれしきはいかはかりかはおもふらむうきは身にしむものにそありける

道信は、婉子と実資の結婚後に二十三歳で夭折する。道信―柏木、婉子―女三宮、実資―光源氏の人物関係図が出来上がる。実際には道信は、柏木のような行動にでることはなく、亡くなってしまふ。道信が疫病で命を落としていなかったら、婉子に想いをかけ続けたのであろうか。

柏木の場合、『柏木は女三の宮を』いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れぬ。(若菜下巻226頁)と、女三の宮をさらってどこかで二人で暮らしたいとまで思うようになる感情の高まりがみられる。柏木は、政治的権力よりも恋に身をささげ、この世のすべてのものよりも自分の命よりも恋に打ち込み、恋のみに生きる男性の姿として描かれているのではないだろうか。政治的な現実の世界に全く生きていないのである。

藤裏葉巻で准太上天皇となった光源氏の正妻である女三の宮と柏木との恋は、「帝の御妻」との逢瀬に近いような書き方がなされている。これについて高橋麻織氏は、

藤壺中宮との密通、そして冷泉帝の誕生と即位は、光源氏の人生に大きく関わる点で物語展開に影響する。しかし、「后妃の密通」

不義の子の即位という筋書きは現実的にはあり得ない。それは「准拠」の指摘によって明らかにされた『源氏物語』と「歴史」との密接な関わりの中でこそ、実現することができたと理解される。つまり、『源氏物語』は、虚構を確立するために、准拠を方法として物語に取り入れたのである。中世の延喜天曆准拠説では、事実上の人

物や出来事を比較した上で、両者の共通点を列挙することを目的としたが、むしろ史実には有り得ない不義の子冷泉帝の即位という史実の相違点、すなわち虚構の確立にこそ、准拠の目的は存したのである。

と指摘なさっている。

柏木と女三の宮の逢瀬も、史実の後妃との逢瀬を准拠とし、虚構を確立したと考えられる。

【柏木】「世はいと定めなきものを、女御、后もあるやうありてものしたまふたぐひなくやは。まして、その御ありさまよ、思へばいとたぐひなくめでたけれど、内々は心やましきことも多かるらむ。」

(若菜下巻④220頁)

柏木は、小侍従との会話で、女御、后にも帝以外との恋があることを話し、女三の宮は六条院入りしてから、不快なことも多いだろうと話している。

帝の御妻をもとり過ちて、事の聞こえあらむにかばかりおぼえむことゆゑは、身のいたづらにならむ苦しくおぼゆまじ。しかいぢじるとき罪には当たらずとも、この院に目を側められたてまつらむことはいと恐ろしく恥づかしくおぼゆ。

(若菜下巻④230頁)

柏木は、自分と女三の宮との恋を帝の后との恋愛と比較して、それが表沙汰になったとしても、死を覚悟しているので苦しくはない、としている。自分の命よりも女三の宮との恋に身を投じる姿が描かれている。

帝の御妻をも過つたぐひ、昔もありけれど、それは、また、いふ方異なり、宮仕といひて、我も人も同じ君に馴れ仕うまつるほどに、

おのづからさるべき方につけても心をはしそめ、ものの紛れ多かりぬべきわざなり、女御、更衣といへど、とある筋かかる方につけてかたはなる人もあり、心ばせかならず重からぬうちまじりて、思はずなることもあれど、おぼろけの定かなる過ち見えぬほどは、さてもまじらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬ紛れありぬ

べし、

(若菜下巻④ 254頁)

光源氏も、帝の后との例を出しているが、それは今回とはまた違うといっている。同じ帝に仕えているうちに恋愛感情を持つことがあり、表沙汰にならないこともある、と考えている。いずれにしても、この三例は、女三の宮が准太上天皇の正妻となったことで、帝の后との恋が関連づけられている。

光源氏は、准太上天皇となっているが、紫式部の時代、天皇経験者ではなく、上皇となった歴史実在人物に敦明親王がいる。道長の政権にも関連している。「かの先祖の大臣は、いとかしこくありがたき心ざしを尽くして、朝廷に仕うまつりたまひけるほどに、ものの違ひめありて、その報いにかく末はなきなりなど、人言ふめりしを、女子の方につけたれど、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬも、そこらの行なひのしるしにこそはあらめ」(若菜上巻④128頁)、『孟津抄』<sup>②</sup>は、敦明親王の例を引いている。敦明親王は、小一条院(九九四—一〇五一年)と称した。三条天皇(冷泉天皇九六九年退位第二皇子、母藤原超子、外祖父兼家九九〇年没)の第一皇子である。後一条天皇(敦成親王)の東宮に立てられた。天皇より十四歳年長の皇太子であった。後一条天皇は、道長の外孫(娘・彰子の子)のため、わずか九歳で即位している。敦明親王の母は大納言兼左大将、藤原済時の娘で後見が弱かった。済時は実方の伯父で養父にあたる。後一条天皇には、一歳違いの同母弟である敦良親王がいた。次期天皇は本来、皇太子の敦明親王であるが、道長は敦良親王の即位を望んでいた。寛仁元(一〇一七)年五月、敦明親王の庇護者の父・三条天皇が四十二歳で亡くなる。敦明親王は、東宮を辞退し、天皇即位を放棄する。道長と交渉し、天皇経験者(上皇)と同様の待遇を求めた。敦明親王の東宮辞退の意は道長の息子、能信(道長の第二夫人、源明子の子)から道長に伝えられた。『御堂閑白記』<sup>③</sup> 敦明親王と道長の会談が行われた。その内容を光源氏と対照させる。敦明親王に院号「小一条院」に対して、光源氏は「六条院」、敦明親王は上皇に匹敵する

経済的処遇に対して、光源氏「太上天皇に准ずる位」「退位された帝」と同じである。源氏物語では珍しい昔の例にならったとされる。

「その秋、太上天皇に准らふ御位得たまうて、御封加はり、年官年齢など、皆添ひたまふ。かからでも、世の御心に叶はぬことなけれど、なほめづらしかりける昔の例を改めて、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなり添ひたまへば、内裏に参りたまふべきこと、難かるべきをぞ、かつは思しける。かくても、なほ飽かず帝は思して、世の中を憚りて、位をえ譲りきこえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。」

(藤裏葉巻③ 454頁)

「御賜はりの御封などこそ、みな同じごとと遜位の帝と等しく定まりたまへれど、まことの太上天皇の儀式にはうけぱりたまはず、」

(若菜上巻④ 45頁)

御下賜の御封など、みな同じように、退位された帝と同じく決まっていらいちゃったが、ほんとうの太上天皇の儀式には威勢をお張りにならない。敦明親王は、道長の娘の寛子を妃(もとの妃の延子と、その父藤原顕光の悲嘆は大きく、死後、道長一族にたたる怨霊となる。)とし、近衛御門(高松殿)に婿取られることとなった。これに対して、光源氏は、皇女・女三の宮と結婚した。小一条院の子どもたちは、三条天皇の猶子(兄弟・親類または他人の子を自分の子としたもの)とし、小一条院の子は、二世王でありながら親王の扱いとなった。この対応は光源氏にはなかった。これに対して、『伊勢物語』の在原業平と二条后(清和天皇妃、藤原長良の娘 藤原高子)との恋は、帝の后妃との恋であるが、臣下になつた元皇子が藤原氏貴族と逢うという、源氏物語の柏木とは反対になっている。権力の主流貴族である柏木が皇族の妻と逢って死ぬという結末である。

『伊勢物語』との関連について、高橋麻織氏は、「文徳天皇の皇統が陽成天皇で断絶してしまうことと関わりがあるのではないだろうか。仁明天皇の後継者として光孝系皇統の正当性を強調する必要がある、そのた



め、文徳天皇を貶める手法が取られたと考えられる。」と指摘なさっている。これにより、柏木と女三の宮の子である薫は、光源氏の子として苦悩と道心を抱えて生きてゆくことになる。皇女の結婚に官職の昇進や位階が関係してくるため、柏木と道信の昇進を並べてみる。

『源氏物語』の柏木<sup>②</sup>。頭中将（のちに太政大臣）の長男。母右大臣の四の君。十七歳 左少将。二十歳 中将。玉鬘に懸想。楽の名手として有名。二十三歳 能書として知られる。右衛門督。女三宮（十三歳）の降嫁を望むが果たさず。二十四歳 二月、女三の宮、六条院に入る。二十五歳 宰相。三月、蹴鞠で垣間見。宮の飼猫を慰めとする。三十歳 冷泉院退位して、今上帝即位。三十一歳 中納言。女一の宮（落葉の宮）と結婚。三十二歳 権大納言に上り、やがて死去。柏木は、中納言にまで昇進し、臨終のときに権大納言となった。

篠原昭<sup>④</sup>氏は、蹴鞠の場面から女三の宮に逢うまでの六年間（空白四年間）に、冷泉帝から今上帝への代替わりがあり、紫の上の威勢は代替わりの直接影響を受けて相対的に衰えたのであること、「柏木の恋は六条院での女三の宮の不安定な立場の象徴であることを見てきたが、物語の主軸が紫の上と女三の宮との勢威の消長を基軸として進んでいるからには、朱雀院、今上帝の後援による女三の宮の勢威が見せかけに過ぎなかったことが、紫の上の重病によって露呈」と指摘なさっている。

確かに女三の宮は、代替わりによって二品に叙され、六条院での地位が重くなるはずであるにもかかわらず、不安定となっている。

では、藤原道信を挙げる。妹尾好信氏の「藤原道信年譜稿」<sup>⑤</sup>による。天禄三年（九七二）〜正暦五年（九九四）七月十一日（九九四年八月二十日）藤原北家九条流。太政大臣[為光の三男（四男、五男とも）。母は一条摂政伊尹女。兄に参議誠信・権大納言齐信、弟に権中納言公信ほか。正室は、藤原遠量の娘。中古三十六歌仙の一人。源氏物語の柏木と同じく太政大臣の息子である。官位歴をまとめてみる。

寛和二年（九八六年）十月二十一日、伯父兼家（この年外孫一条天皇の即位により摂政）の養子となり宮中の淑景舎（『尊卑分脈』は凝花舎梅壺とする）にて元服。従五位上。十一月十日、侍従。即位後まもない七歳幼帝一条天皇に近侍。

寛和三年（九八七年）九月四日、右兵衛佐。十月十四日、正五位下。一条天皇が東三条殿に行幸したことに伴う叙位。

永延元年（九八七年）石清水臨時祭に実方と舞人の一人。兼家が東三条殿で行った春日詣試楽の舞人の一人。実方とともに比叡山で修行する花山院（永延元年十月帰洛）を思い出しつつ詠歌。

永延二年（九八八年）正月二十九日、左近衛少将。

三月二十五日、従四位下。

永延三年（九八九年）正月二十九日、兼近江介。

三月四日、兼但馬権守。

正暦二年（九九二年）九月二十一日、左近衛中将。

正暦三年（九九三年）正月三十日、兼美濃權守。

同三年六月、父為光が薨去。これより一年間の喪に服する。四十九日の中陰が明けるまで、道信は、父為光が建立し菩提寺とした法住寺に籠っていたらしい。翌年、父を悼む歌を連作する。

正暦五年（九九五年）正月十二日、従四位上（近衛府旁）

七月初め、婉子女王が藤原実資と結婚か。道信の傷心の歌は先に引いた。同年七月十一日、二十三歳で夭折した。道信は、一条天皇の幼少期に近くにいた人物である。紫式部日記に一条天皇も源氏物語の読者であったことがわかるから、一条天皇も柏木が源氏物語に登場したときには、幼い頃に近侍していた道信を思い出したと思われる。

官職をみると兵衛佐、近衛少将、近衛中将と官職の異称柏木と称され太政大臣の子息で夭折したところが源氏物語の柏木と同じである。

実方の官職歴を付しておく。父・定時が早逝したため、叔父の大納言・

済時の養子となる。天禄三年（九七二年）任左近衛将監。天禄四年（九七三年）叙従五位下。天延三年（九七五年）任侍従。天元元年（九七八年）任右兵衛権佐。天元五年（九八二年）叙従五位上。兼備後介。永観元年（九八三年）叙正五位下。永観二年（九八四年）任左近少将。『日本紀略』より寛和元年（九八五年）兼播磨権介。寛和二年（九八六年）任右馬頭。正暦二年（九九一年）任右近中将。正暦四年（九九三年）叙従四位上。正暦五年（九九四年）転左近中将。長徳元年（九九五年）兼陸奥守。叙正四位下。長徳四年（九九八年）十二月卒。四十歳。疫病の流行に倒れたと思われる。正暦五年正月に九州から流行がはじまり、翌長徳元年（九九五）にかけて全国を席捲した痘瘡（『日本紀略』<sup>22</sup>）がある。

この疫病は、やがて左大臣源重信、右大臣道兼をはじめ、大納言藤原朝光、実方の養父・大納言藤原済時、権大納言藤原道頼、中納言源保光・源伊勢などを斃し、政府は壊滅状態となってしまうのである（そのおかげで道長は政権の座にいたのであった）。実方は、養父・済時の喪が明けた九月に陸奥国に出発した。長徳四年にも、五月から疫病の流行がはじまり、六月七月に猖獗をきわめた。

京師の男女の死者は甚だ多い。下人は死なない。四位以下の妻は最も甚しい。これを赤斑瘡と謂う。主上（一条天皇）を始め庶人に至るまで、上下老少で、この瘡を免れる者は無い（『日本紀略』）。

長徳四年十二月（九九九年一月）任国で実方が馬に乗り笠島道祖神の前を通った時、乗っていた馬が突然倒れ、下敷きになって没した。『拾遺和歌集』に七首入集、以下の勅撰和歌集に六四首が入集している。道信も実方も官職が柏木に関連がある。

他に、天皇の後・女御と恋をした例は、藤原綏子（藤原兼家女、三条天皇東宮妃）と源頼定、藤原元子（藤原顕光女、一条天皇女御）と源頼定（一条天皇死後）がある。顕光は元子を出家させる。朱雀院が女三の宮を出家させるところと同じである。が、元子は出奔し、頼定と同居し、一女を産んだ。長和五年四月二十日の賀茂斎院御禊において道長の棧敷

の西の頼定の棧敷に顕光の車が入り、ともに御禊を見物したというのである。道長は、「甚だ能い事であった」と記している（『御堂関白記』）。そして、降嫁が政治的に利用された例がある。長和四年（二〇一五）、道長の退位要求に対して、三条天皇は十三歳の女二の宮（禊子内親王）を頼通に降嫁させることを提案した（『小右記』<sup>23</sup>）。頼通は、病に苦しめられ、降嫁は中止となった（『御堂関白記』）。婿候補であったときを除くと源氏物語の柏木には政治を求める一片さえもないのである。ただ純粹に女三の宮を想う姿が描かれている。

## 五 「よそに見て」の和歌表現

柏木が女三宮に逢う前に光源氏が女三の宮に想いをかけていないと和歌で批判する場面がある。

【柏木】「いかなれば花に木づたふ鶯の桜をわきてねぐらとはせぬ春の鳥の、桜一つにとまらぬ心よ。あやしとおぼゆることぞかし」と、口ずさびに言へば、いで、あなあぢきなのものあつかひや、さればよ、と思ふ。

【夕霧】「みやま木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花の色にあくべきわりなきこと。ひたおもむきにのみやは」と答へて、わづらはしければ、ことに言はせずなりぬ。異事に言ひ紛らはして、おのおの別れぬ。（若菜上巻④ 146～147頁）

柏木の歌は、「鶯の鳴くをよめる／木づたへばおのが羽風に散る花を誰におほせてこころ鳴くらむ（古今・春下・素性）」を引く。桜Ⅱ女三の宮、鶯Ⅱ光源氏、花Ⅱ女君たちとなっている。夕霧の深山木の歌は、「みやま木によるは来てなくはこ鳥のあけばかはらんことをこそ思へ（古今六帖・六・はこどり）」を引く。みやま木Ⅱ紫の上、はこ鳥Ⅱ光源氏、花Ⅱ女三の宮となっている。『道信集』に「みやま」がみられる。みやまは、人目のつかないところをさがす意味である。

春の暮つ方、実方朝臣のもとにつかはしける

75 散りのこる花もやあるとうち群れてみやまがくれを尋ねてしがなかへし

76 ちりのこるはなもたづねはたづねみんななましはしかぜにしらすな

75 番（新古今和歌集167）の詞書に「小一条の中將のもとより」とあって、76 番が道信歌になっている歌集もある。

柏木の「ながめ」と「よそに見て」についても、道信の和歌表現を挙げる。

衛門督は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。大將は、心知りに、あやしかりつる御簾の透影思ひ出づることやあらむと思ひたまふ。（若菜上巻④143頁）

「一日、風に誘はれて、御垣の原をわけ入りてはべしに、いどこいかに見落としたまひけむ。その夕べより、乱り心地かきくらし、あやなく今日は眺め暮らしはべる」など書きて、

よそに見て折らぬ嘆きはしけれどもなごり恋しき花の夕かけとあれど、侍従は一日の心も知らねば、ただ世の常の眺めにこそはと思ふ。あやなく今日はながめ暮らしはべる（若菜上巻④148頁）

「ながめ」については、『伊勢物語』九十九段『古今和歌集』恋一の在原業平歌「右近の馬場のひをりの日、向ひに立てたりける車の下簾より、女の顔はのかに見えければ、詠んでつかはしける／見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ」の影響を室田知佳氏が指摘なさっている。

『道信集』（『後拾遺和歌集』798）を挙げる。

三月ばかり、ある人に

38 つれづれと思へばながき春の日にたのむこととはながめをぞする  
67 ゆきかへるたびにとしふるかりがねはいくそのはるをよそにみる  
らむ（後拾遺69）部外者として使われている。

90 すまのあまのなみかけころもよそにのみ見しはわが身になりぬべ

きかな（新古今41）

他人事としてきく意味につかわれている。柏木には「眺め」る姿が多い。

いといたくながめて、端近く寄り臥したまへるに、来てねうねうといとらうたげになげば、かき撫でて、うたても、すすむかな。と、ほほ笑まる。

【柏木の独詠歌】「恋ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなく音なるらむ

これも昔の契りにや」と、顔を見つつのたまへば、いよいようたげになくを、懷に入れてながめゐたまへり。（若菜下巻④158頁）

「眺め」ている間に、時間が過ぎてゆくのであろう。時間性に捉われないほど恋に身を投じる姿が描かれている。

柏木と女三の宮の逢瀬の場面では、女三の宮の和歌に「うき身」＋「消えぬ」の道信の和歌表現が組み合わされているのは、歌ことは表現上の一致よりも柏木の魂も身を離れるほどの心地につなげる方がよいであらう。

【柏木】起きてゆく空も知られぬあけぐれにいくの露のかかる袖なり

と、ひき出でて愁へきこゆれば、出でなむとするに、すこし慰めたまひて、

【女三の宮】あけぐれの空にうき身は消えなむ夢なりけりと見てもやむべくと、はかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す。（若菜下巻④228～229頁）

「よそにみて」がある柏木の場面を挙げる。

【柏木の独詠歌】悔しくぞつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかさしならぬに

と思ふも、いとなかなかなり。世の中静かならぬ車の音などを、よ

そのことに聞きて、人やりならぬつれづれに、暮らしがたくおぼゆ。

(若菜下巻 232頁)

世間一般のことをよそにみて暮らしている。世の中のことと外のこととで、柏木には政治が人生に深くかわってこない。道信が兼家の養子になり、兼家死去後は道兼の養子になって政治力を求めていることは違い、柏木は政治性から逸脱している。

## 六 まとめ

以上、若菜上巻・若菜下巻・柏木巻を中心に、柏木と道信の和歌表現を考察してきた。「泡の消え入るやうにて」の和歌表現は、叶わない恋で天折した道信の面影が強まり、柏木がはかなく亡くなったことが強調される。柏木巻の「消え入るやう」は、出家後の女三の宮の様子と、死の直前に女三の宮の出家をきいた柏木の心情表現に使用され、二人が同じときと同じ心情であったと考えられる。また、女三の宮からの返歌にも心情に「消ゆ」の表現が使われ、「この世の思ひ出」という柏木の重い心情につなげている。身分の高い女性に叶わない恋をした男性の心情について、説得力をもった叙述が繰り広げられている。

また、柏木死去後の哀傷の場面では、出家した女三の宮と夫を亡くした女二の宮(落葉の宮)とが同時に鈍色の衣を着て二重写しとなっていることを述べた。こういった人物の重ね合わせが、柏木と夕霧にもあり、重層的な人物関係と人物像との継承を円滑にしているといえる。

道信の「世に経れば」の和歌表現によって、外の人々の時間の流れと恋に捉われた柏木の時間の流れの違いが明確になった。当時から人々の記憶にあった「うきは身にしむ」という道信の和歌表現により、柏木の高貴な女性との恋が虚構として確立した。

次に、柏木と道信の官歴を並べ、同じく太政大臣の息子で、官職の異称柏木と称される近衛中将であったことを示した。

道信の「よそに見て」の和歌表現によって、外界と自分との意識の差

が明確になり、「世に経れば」と和歌表現の時間性と結び付いて、外の空間や、世の人々に流れている時間や政治が存在しない世界に身を置き、恋のみにその身を投じている姿を描出した。

「あはれ衛門督」と称される柏木は、天折した実在の人物の和歌表現によって、本来ならば難解な人物関係を重層的に描出されている。和歌表現によって場面と場面が結び付き、さらに重層的な表現へとつながっている。ともすれば、特異で描写しにくいと推測される柏木の心情表現の外意識と時間性を和歌表現によって築き上げていると考えられる。

(1) 北村季吟著・有川武彦氏校訂『源氏物語湖抄(増注)』講談社 一九八二年五月十日 九一五頁

(2) 藤本勝義氏「光源氏の変容―柏木・女三宮密通と光源氏の論理構造―」『青山学院女子短期大学紀要三十六』一九八二年十一月十日

(3) 以下、『実方集』の引用(傍線を付けたところがある)は、宮内庁書陵部蔵健治元年奥書本を底本とする『私家集大成中古I』所収の『実方集』(和歌史研究会編 明治書院 一九七三年十一月二十五日)の翻刻を参照した。

詞書は、「うさのつかひのおり、もろともにみんと契りけるを、かの少将【道信】なくなりてとのあき」となっている。宇佐使発遣は正暦三年十月二十日、ただしこのときの使いは源宣方である。

(4) 木船重昭氏『実方中将集小馬命婦集注釈』大学堂書店 一九九三年五月十八日 三四〇頁

(5) 注(3)に同じ。

(6) 以下、『道信集』の引用(傍線を付けたところがある)は、『私家集大成中古I』(和歌史研究会編 明治書院 一九七三年十一月二十五日)による。

(7) 以下、源氏物語の本文の引用(傍線を付け、【 】と解説を付けたところがある)は、新編日本古典文学全集『源氏物語③』による。校注・訳 阿部秋生氏・秋山虔先生・今井源衛氏・鈴木日出男氏 小学館 一九九六年一月十日。

『源氏物語①』一九九四年三月一日、『源氏物語②』一九九五年一月十日、『源



氏物語④』一九九六年十一月十日、『源氏物語⑤』一九九七年七月十日、『源氏物語⑥』一九九八年四月一日による。

(8) 以下、勅撰集の和歌の引用(傍線をつけたところがある)は、『新編国歌大観』新編国歌大観編集委員会 角川書店 日本文学 Web 図書館 古典ライブラリー二〇二二年四月一日配信開始

(9) 未刊國文古註釋大系『異本紫明抄』古澤義則編 帝国教育会出版部 一九三七年七月

(10) 小島憲之氏・新井栄蔵氏新日本古典文学大系5『古今和歌集』岩波書店 一九八九年二月二十日 一三九頁

(11) 注(10)に同じ。二四八頁

(12) 以下、『万葉集』の引用は、注(8)を基とし、小島憲之氏・木下正俊氏・佐竹昭広氏(日本古典文学全集3『万葉集二』小学館一九七二年五月三十一日)による。

(13) 村井利彦氏「源氏物語爪印・柏木巻」『山手日文論攷第二十五号』二〇〇五年三月三十一日 神戸山手短期大学日本語・日本文化学科 四十一頁

(14) 注(4)に同じ。二三三頁

(15) 松尾聰氏・永井和子氏 日本古典文学全集11『枕草子』小学館 一九七四年四月三十日

(16) 森藤侃子氏「内親王の降嫁——若菜上・下——」『源氏物語講座第三巻光る君の物語』勉誠社 一九九二年五月一日

(17) 土方洋一氏「過ちと応報——柏木巻——」『源氏物語講座第三巻光る君の物語』勉誠社 一九九二年五月一日

(18) 注(7)に同じ。『源氏物語④』若菜下巻付録五六四〜五六六頁

(19) 高橋麻織氏「帝の御妻をも過つたぐひ——『源氏物語』から歴史物語へ」(日向一雅編『源氏物語の礎』青簡社、二〇一二年三月一日) 源頼定についても言及がある。百十一頁

(20) 野村精一氏編 源氏物語古注集成第四巻第六巻『孟津抄』九条植通著 一九八〇年二月〜一九八二年二月 桜楓社 三四三〜三四四頁

(21) 倉本一宏氏訳『藤原道長「御堂関白記」全現代語訳』講談社 二〇〇九年五月十一日。以後、御堂関白記はこれによる。

(22) 注(19)に同じ。百十二頁

(23) 秋山虔先生編『別冊国文学No.13 源氏物語必携Ⅱ』學燈社 一九八二年二月十日

(24) 篠原昭二氏「柏木の情念」『源氏物語の論理』東京大学出版会一九九二年五月二十五日

(25) 妹尾好信氏「藤原道信年譜稿」広島大学紀要『古代中世国文学』10号 広島平安文学研究会 一九九七年八月七日

(26) 注(4)に同じ。

(27) 国史大系第五巻『日本紀略』経済雑誌社一九九七年—一九〇一年

(28) 倉本一宏氏『藤原道長の日常生活』講談社 二〇一三年三月二十日 一八三〜一八四頁

(29) 大日本古記録『小右記』東京大学史料編纂所編纂 岩波書店 一九八七〜九六年

(30) 室田知香氏「柏木物語の引用的表現とその歪み——『帝の御妻をも過つたぐひ』の像と柏木——」『日本文学 五十六(十二)』日本文学協会 二〇〇七年十二月十日 一一〜二十四頁

(二〇一七年九月十一日受稿)



## Study of the Character of Kashiwagi in The Tale of *Genji*: *Michinobu's Waka Poems*

Saori Shibamura

Department of Education, Kamakura Women's University

### Abstract

Of the 54 volumes of the Tale of *Genji*, *Kashiwagi* mostly appears from the volume of the first “Wakana” of the second “Wakana” volume, in the “Kashiwagi” volume.

Kashiwagi lives a life of agony caused by The Third Imperial Princess.

In this paper, I will clarify how skillfully *Murasaki-Shikibu* portrays the character of Kashiwagi as well as the historical waka poet *Michinobu Fujiwara's* depiction of this character.

Key words: The Tale of *Genji*, Kashiwagi, Third Imperial Princess